

デジタルハリウッド大学がコロナ禍で実施した2度目の完全オンライン新入生研修

2nd Fully Online Freshman Seminar at DHU in the COVID-19 Period

田宮 よしみ TAMIYA Yoshimi

デジタルハリウッド大学 学生支援グループ
Digital Hollywood University, Student Support Group

デジタルハリウッド大学では、2021年度新入生研修をオンラインで実施した。新型コロナウイルス感染症が蔓延する中で、研修実施となったため、当初のオンラインと研修旅行を組み合わせたハイブリッド研修から、完全オンライン研修に内容を変更して実施することになった。新入生313人がScrapboxを利用し2,642ページからなる「DHU超ウィキ」を作成した。本稿では、コロナ禍の中で実施した2度目の完全オンラインでの新入生研修および学生の受講状況について紹介する。

キーワード：新入生研修、オンライン、大学教育、Wiki

1. はじめに

デジタルハリウッド大学(以下「本学」)では、2005年の開校以来、毎年4月に新入生研修を実施してきた。2017年まではアメリカなどへの海外研修を実施し、現地のコンテンツ産業で活躍するデジタルハリウッド卒業生の話聞き、海外で通用するクリエイターになるためのヒントや英語でのコミュニケーションの重要性を学び、これからの4年間の学びについて考える機会としてきた。しかし、外国人留学生の増加に伴いビザ取得の難しさなどから海外研修に参加できない留学生が多数発生し、入学直後の学生が日本人と外国人留学生で分断されるという問題が生じた。1年に渡る検討の結果、2018年4月の研修より日本国内での旅行型研修に切り替えることになった。国内研修に切り替えるにあたり、新たに内容を「デジタルコミュニケーションを活用した地域振興をテーマに地方を訪問し、与えられた課題に取り組みプレゼンテーションを行う」と設定した。2018年は地震から復興中の熊本県阿蘇地域、2019年は鳥取西部地域を舞台に研修を実施した。2020年4月の研修は北海道で実施する予定であったが、新型コロナウイルス感染症が国内外で猛威を振るい始めたため、旅行型研修を中止し完全オンラインで実施することになった^[1]。2021年度は群馬県を舞台に研修を実施する予定であったが、新型コロナウイルス感染症の収束が見込めず、300人規模の学生および教職員が集合して実施するには研修の感染リスクが高かったため、2020年度に続き旅行型研修を中止し完全オンラインで研修を実施することになった。国内研修のテーマから外れることになったが、完全オンラインで学生にどのような機会を提供したいか、何を体験して欲しいかを念頭に研修を企画することになった。

本稿では、2021年度新入生研修「First Field 2021」について紹介するとともに、2年連続で実施したオンライン研修から見た相違点についても記述する。

2. 2021年度新入生研修

2021年度新入生研修(以下「本研修」)は、2021年4月12日～4月16日の5日間、新入生313人をオンラインでつなぎ、「DHU超ウィキを作成する」をテーマに実施した^[2]。

ウィキ制作ツールは「Scrapbox個人/教育利用版」を利用した。

本研修は、学生たちが共同執筆と相互編集をするというオンラインコラボレーションを体験し、ページ作成を通じて、(1)同級生につ

いて知る、(2)大学について知る、(3)教職員について知る、を目的に企画した。

2.1 企画

昨年度のオンライン研修に続き、本学の新生入生研修担当者と本研修の総合プロデューサーである教員、ファシリテーションのプロ2人を合わせた4人がZoomでのミーティングを繰り返しながら研修案と実施方法の大枠を固めていった。その後、研修内容に応じ各分野のプロである教員を招聘、運営をサポートする職員をメンバーとして追加した。これら運営メンバーは、今年度の企画内容に応じ一部メンバーの入れ替えはあったが昨年度研修の運営メンバーがほぼ再集結する形で構成された。各分野のプロである教員が参加したことで、研修課題や5日間のプログラムの詳細が詰まっていった。

また、ウィキページ作成に当たり、学生にとって必要であろう文章の書き方、インタビューの仕方を教えるため、『面白い文章の書き方講座』と『インタビュー術講座』の講師として外部から専門家を招聘した。

2.2 研修概要

「DHU超ウィキを作成する」をテーマにScrapboxを使用し、個人による自己紹介ページ、チーム担当別の教職員および卒業生紹介ページ、大学の歴史についてのページを作成した。ウィキページ内のアイコンや画像、校歌制作も学生たちが担当し、文字だけでなく、画像や音楽も含む2,642ページからなる「DHU超ウィキ」を作り上げた(図1)。

オンラインでの研修実施であったため、研修ツールとしてZoom、Google Classroom、Slackを活用した。

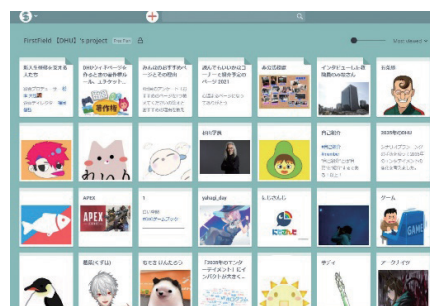


図1：Scrapbox「DHU超ウィキ」ページ

2.3 事前準備

研修実施に向け、3ヶ月前からツールや運営態勢の確認および関係者への協力を呼び掛けた。

ツールは、課題提出用にGoogle Classroomを作成、全体連絡やコミュニケーションの促進、グループ作業用にSlackで55のチャンネルを作成、Zoomは6アカウントを使用して研修内容ごとのミーティングスケジュールを設定、Scrapboxのプロジェクトページの立ち上げ、運営メンバー用のFacebookグループとSlackチャンネルを作成し運用した。また、学生向けに本学グループウェア「デジキャン」で受講準備に関する告知を行い、研修開始日までに指定のGoogle ClassroomとSlackチャンネルへの参加、本学メールアドレスを使用したScrapboxのアカウント作成および「マンガでわかるScrapbox」ページの閲覧を求めた。Zoomでの受講に関し、氏名表記やイヤホンの利用、個人情報が見えないよう注意するなどのルールを事前に周知させた。

運営メンバーの殆どがScrapboxを利用した経験がなかったため、2021年1月に運営メンバー用のプロジェクトページをScrapbox上に立ち上げ、マイページの作成、使い方やCSSなどの機能についての理解を深め、研修準備を進めた。

また、教職員・卒業生紹介ページの作成に当たり、本学で専門科目および教養科目を担当する教員、学生生活の中で一番接点が多いであろう履修やキャリア教育を担当する本学職員、クリエイティブ業界で活躍する卒業生など40名のスケジュールを押しさえ、ライターグループ40チームが教職員や卒業生にインタビューし、紹介ページを作成するための準備を整えた。

2.4 5日間のスケジュール

2020年度研修は5日間で1つのプロジェクトを完成させる企画であったが、2021年度研修では毎日異なるテーマでセミナーおよびアクティビティを設定し、5日間で複数のジャンルからなる「超ウイキ」を作成するという企画に取り組んだ(表1)。

表1：5日間のスケジュール

日程	内容
4/12(月)	<p>イントロダクション</p> <p>本日のテーマ：自分について知る、Scrapboxで自己紹介ページを作成する。</p> <p>午前：欲望年表・偏愛マップ作成^[3]</p> <p>午後：Scrapbox使い方講座、マイページ作成</p> <p>企画力・見出し力講座『昨日一日の出来事に見出しを付ける』</p>
4/13(火)	<p>本日のテーマ：人に読んでもらうページを作るための文章の書き方、画像制作について学ぶ。</p> <p>午前：『面白い文章の書き方講座』講師：あつきーさん(LIGエディター)</p> <p>午後：『アイコン制作講座』Photoshopを使用したアイコンの作り方</p> <p>講座後、グループに分かれ活動。</p>
4/14(水)	<p>本日のテーマ：ライターグループは教職員インタビューページを作る。他グループは2日目の続きをする。</p> <p>午前：ライターグループ、大学史編纂グループ、デザイングループ</p> <p>『インタビュー術講座』講師：山口一臣氏(週刊朝日元編集長)</p> <p>上記3グループはその後、担当別に活動。</p> <p>ライターグループ：40チームに分かれ教職員・卒業生にインタビューを行い、午後、教職員・卒業生紹介ページ作成。</p>

4/14(水)	<p>大学史編纂グループ： 午後：杉山学長やDHU事務局スタッフにインタビューしながら大学史ページを作成。</p> <p>デザイングループ： 午後：各グループや個人からの依頼に基づきデザイン画・アイコンを制作(Slack「デザイン発注チャンネル」を活用)。</p> <p>音楽グループ： 終日：2日目午後続き、大学非公式校歌の作詞・作曲活動。</p>
4/15(木)	<p>本日のテーマ：ライターグループは2035年のDHUについて考える。他グループは担当業務を完成させる。</p> <p>終日： ライターグループ：『未来シナリオ講座』後、デジタルハリウッドの未来シナリオについて考える。「2035年のエンターテインメント」「2035年DHUに新設する学部」についてチーム別にページ作成、学長から講評。</p> <p>大学史編纂グループ：元デジハリ社員・学長へのインタビューとページ作成。</p> <p>デザイングループ：「Scrapbox上にあがったページから白いページをなくす」をミッションに、分担してページパトロールとデザイン制作、ページへの貼り付けを行う。</p> <p>音楽グループ：非公式校歌の作詞・作曲、録音。</p>
4/16(金)	<p>本日のテーマ：できあがったページを見て、最後はみんなで楽しもう。</p> <p>午前：40のZoomブレイクアウトルームに分かれ、マイページやおすすめページを紹介(学生全員)。</p> <p>午後：研修のまとめ</p> <p>おすすめページをVTuber4人が紹介、非公式校歌の発表。4日目までの研修映像を視聴、Zoomで記念撮影し終了。</p>

3. オンライン研修2020年度と2021年度の相違点

2020年度、2021年度と2年連続して新入生研修をオンラインで実施した中で、ZoomとSlack、Google Classroomを活用した研修という共通点はあるが、相違点も見られた。研修内容が異なるため研修成果の良し悪しについては論述せず、学生のオンライン受講や研修への取り組み状況について記述する。

3.1 前提

2020年度新入生研修の企画運営に関しては、2020年1月以降の新型コロナウイルス感染拡大により、旅行型研修で準備していたものを急遽、完全オンライン研修に切り替えることになったため、オンラインでどのような研修を実施するのか、内容やゴール設定等、迷いながら決めていった。Zoomを使用しての300人規模の研修も未経験で、運営メンバーも試行錯誤しながらの実施であった。

2021年度新入生研修は、新型コロナウイルス感染症の収束時期が見えない中で企画を進めることになった。群馬県伊香保温泉を舞台にした旅行型研修実施で準備を進めたが、新型コロナウイルスの感染が収束せず旅行型研修の中止およびオンライン研修に切り替えることも想定し、どちらの形態でも成立する内容で企画を進めた。2021年1月中旬に旅行型研修の中止と完全オンラインでの研修に変更することを決定したが、大きな混乱もなく実施することができた。

3.2 学生のオンライン研修への参加状況

(1) 2020年度研修

2020年1月以降、新型コロナウイルス感染症が世界的に流行し、大学運営にも大きな影響が生じた。全国に緊急事態宣言が発令され

ている中、2020年度新入生研修をオンラインで実施した。研修を完全オンラインで実施することは教職員にとって初の試みであったが、新入生にとってもキャンパスに登校することもできず、オリエンテーションや授業のすべてがオンラインで進められること、これからの学生生活や感染拡大に対する不安を抱えた中でのプログラム受講であったと考えられる。

学生を取り巻く状況としては、初の新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言発令であったため、不要不急の外出を避けた学生が多く、在宅率も高く、結果として研修へのコミットメント率が非常に高かった。朝から晩まで自宅にこもり、これからの大学生活への不安もあったからか、研修課題に費やす時間、エネルギー量が非常に高かったように見受けられた。キャンパスに行けない中、友達を作りたいとの思いもあったと推察する。毎朝9時からセミナーが開始されたにも拘らず、Slackを用いたチーム内でのやり取りは夜遅くまで行われていた。Slackの投稿に対する反応も早く、研修時間外の夜間に投稿した告知や募集に関してスタンプや応募などの即レス的な反応が多く見られ、書籍タイトルの募集は受付から締め切りまで1時間弱しかなかったが、23名の応募があった。

(2) 2021年度研修

新型コロナウイルス感染症が収束しないまま1年以上が経過し、新入生もコロナ禍でのオンライン学習への慣れ、自宅でのインターネット環境の整備が進んでいたであろう状況から、オンライン受講はスムーズにできていた。ただ、Zoomセミナーへの慣れなのか、ビデオオフにしたまま離席し、ログ上は出席しているが実際に研修を受講していなかったように考えられるケースもあった。ブレイクアウトルームに移動していない学生に呼びかけても反応がないまま15分以上経過したり、全体セミナー終了後もZoomから退出せず声をかけても無反応であったりなど、実際に研修に参加していたのが疑問視せざるを得ない例もあった。Zoomセミナーは常時ビデオオンの指示を出していたが、毎回25～30名の学生がビデオオフで参加していた。2020年度研修ではインターネット回線速度が遅くZoomからコマ落ちしては入り直す学生はいたが全員がビデオオンで参加していたため、昨年度とのZoomでの受講姿勢に違いを感じた。また、Slackへの課題投稿やチーム別チャンネルへの投稿履歴からも同様に参加が明確に確認できない学生がいた。

首都圏では緊急事態宣言が解除され、4月12日から東京都では新型コロナウイルス感染症まん延防止等重点措置が適用されたことで、学生の外出の機会も増えたように見受けられた。毎日の研修時間中は9割以上の学生の参加が確認できたが、研修時間終了後はアルバイトや他の予定を入れているなどして、お知らせへの反応に数時間から半日程度かかる学生もいた。

2020年度に続き、Slackに「実況チャンネル」を設け、セミナーのポイントや課題、その他学生に役立つ情報を発信した。セミナーで聞き逃した内容をキャッチする上で役立つとの学生の声も多かったが、昨年度と比べSlack投稿を確認した際のスタンプ率が低く、1つの投稿に2～3個しかスタンプが押されず、どれほどの学生が情報を拾っていたか判然としにくい。Slackを通しての課題に関する質問も昨年度と比べ活発ではなく、全体チャンネルに関しては運営メンバーからの一方的なお知らせチャンネルと化していた。研修時間外に告知された内容については翌朝の研修開始のタイミングで確認する学生が多かったようで、研修終了後の夕方や夜間に行った役割分担のためのアンケートも18名の回答しか得ることができなかった。公平を期すため、同一のアンケートを翌朝の研修開始時に再度実施したところ、1時間で120名強の回答を回収することになった。与えられた課題は丁寧にこなした学生が大半を占め、担当によっては深夜まで作業する学生もいたため、学生のコミットメント率が著しく低いということではないが、「授業」が終わればその日の研修は終了、とのスタンスであることが見て取れた。

4. おわりに

新型コロナウイルスの収束時期は依然として見えない。入学後間もない新入生全員が参加し、デジタルコミュニケーションを使って社会に貢献できることを実感し、これからの4年間の学びについて考える機会とする新入生研修も、2020年・2021年は「デジタルコミュニケーションを活用した地域振興」という本来の趣旨とは異なるテーマで実施することになった。本稿で過去2回の研修について触れたが、友人や、会えば挨拶できる知人を作り、オンライン授業中心であっても学生生活が孤独なものにならないようにするためには何ができるか、を考えて企画した内容でもあった。

2年連続でオンラインによる研修を実施したことで、オンライン研修を行うためのツール周りの準備やスケジュールの組み方について経験を積むと同時にチーム編成の方法についての課題も出てきた。運営する側としてはオンライン研修とは言えアナログでの作業も多く、効率的とは言えない部分もあった。特に1日目に回収した参加者全員の偏愛マップを研修終了後の夕方から1枚ずつ確認しながら趣味嗜好に合わせて学生をチームに割り当て、また希望の役割に応じてグループ割りを行う作業には約20時間かかった。来年度の研修については、旅行型とオンライン型の二つで研修企画を立て準備を進めていくが、オンライン研修になった場合、過去2回の研修で得た知見を活用し、アナログ作業にかかる負荷を減らせるよう工夫しながら実施したい。

参考文献

- [1] PR TIMES: "開催レポート デジタルハリウッド大学[DHU]新入生研修を完全オンラインで実施～「コロナ後の未来を考える」をテーマに新入生300人が5日間で電子書籍を製作～"
<https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000001813.000000496.html> (参照2021年7月30日)
- [2] デジタルハリウッド株式会社: "デジタルハリウッド大学(DHU)新入生研修 "First Field2021" をオンラインで実施 新入生300人が5日間でScrapboxを利用し2,642ページからなる「DHU超ウィキ」を作成"
<https://www.dhw.co.jp/press-release/20210514dhufirstfield/> (参照2021年7月30日)
- [3] 大塚英志: 『ストーリーメーカー 創作のための物語論』アスキー新書(2008年)。